〝神聖なる病について〟に関する精神医学史的考察

神谷美恵子

序言

現代の精神医学のありかたを全体として正しく把握するためには、それが現在の姿をとるに至った歴史をきわめる必要があることは云うまでもない。医学の諸分野の中でも、とくに精神医学は、それが人間の心という、無形の現象を対象とするだけに、長い間神話的な想像や哲学的思弁の中に埋もれていて、合理的、自然科学的な研究態度の中で確立されるに至るまでに、他の医学の分野よりもずっと時間と手間がかかって来た。精神障害もまた人間の病の一部であり、医学の正当な対象たるべきものである、ということに人は長い間気がつかなかったようである。

古代の精神医学の歴史の中で、上にのべたような、合理的、自然科学的な研究態度の源泉と目されているのは、他の医学分野の場合と同じく、やはりギリシアの〝医聖〟Hippocrates である。しかしこの Hippocrates は多分に神話的存在になっており、Zilboorg のような精神医学史家は次のようにさえ云っている。〝彼 (Hippocrates) は時には1人の人間であるようには全然思えない時もあり、むしろ多くの書きものと伝統を基盤として作りあげられた合成物のように考えられることもある〟(1)。

しかし Hippocrates については Suidas, Tzetzes 及び Soranus らの古い伝記三篇もあるし、近代になって研究も深められ、この偉大な医学者の実在とその一生は、少なくともその大体の輪廓だけは明らかになって来ている。(2, 3, 4) それと共に Zilboorg の云う〝多くの書きもの〟即ち Corpus

hippocraticum の成立次第と内容の分析もすすめられて来た。その一部である〃神聖なる病について〃という書きものをここではとくにとりあげるつもりであるが、その前に、その背景として、Hippocrates 及び Corpus hippocraticum についてざっと述べておきたい。

Hippocrates はギリシア文化の最盛期にあたる紀元前460年頃に Cos 島に生まれ、85才、90才、104才または109才に歿したという諸説がある。この時代には Pericles, Anaxagoras, Thycydides, Sophocles, Euripides, Aristophanes, Socrates 等の偉大な人々が活躍したわけであるが、医学方面ではふしぎに Hippocrates の名前がひとり大きく光っているのみである。彼の長い一生は臨床医家としての多方面にわたる活動にみちているが、ここでは省略しておこう。

Corpus hippocraticum（ヒポクラテス全集とでも訳すべきか）が Hippocrates 一人の筆になるものではないことはすでに定説となっている。この一連の書物の内容がその表現においても思想的傾向においても、ひどくまちまちであるところから、おそらくこれは Cos 島における Hippocrates 学派の医学校にあった図書の一部ではないか、と云われている(5)。そしてそれが紀元前3世紀の初期頃に Ptolemaios 王家の委嘱により、Alexandria の学者たちによって集められ、筆写されたのではないか。またその際に、それまでにこの図書の中にはいっていなかった後世の書きものまで加えられたのではないか、と想像されている。これらすべての書きものがイオニアの方言で記されているという事実も、この方言が当時の学界の共通語であったらしいことを考えれば必ずしもふしぎではない(6)。

約70篇に及ぶ Corpus hippocraticum の諸著書の各々の著作年代を正確に推定することはきわめて困難である。外的根拠としては Galenos（130～200 A.D.）その他がこれについて述べているところがたよりになるし、内的根拠としては、1）思想的傾向、2）医学上の学説、3）文体、4）言葉づかいと文法、等によってある程度の判断がつく。従って、およそどの著書が Hippocrates 自身の筆によるものか、ということも大体見当がついて来てい

る。 Hippocrates の文章は簡潔明晰で格調高く、史家 Herodotos のそれに似ており、その思想的傾向はあくまでも経験と観察を重んずる自然科学者のそれであると云われている(7)。まだ実験による帰納法ということとは無縁の時代であったから、 Roback の云うように、 Hippocrates はするどい直観と観察力を基盤とする phenomenalist と呼ぶこともできよう(8)。

以上のような次第で、Corpus hippocraticum は Hippocrates 及び主としてその流れを汲む弟子たちによって書かれた書物の集大成といえる。これらの書物はそれ以来医学的知識の源泉となり、1840年頃まではヨーロッパの医学校で正規の教科書として用いられていたという位で(1)、 約2000年の医学史を通じて、学理上にも実地の上でも、はかり知れぬ影響を及ぼして来た。

小論においてはこの Corpus の一部をなす "ΠΕΡΙ ΙΕΡΗΣ ΝΟΥΣΟΥ" (〃神聖なる病について〃) をとくにとりあげ、(1)その著者及び著作年代、(2)その精神病に関する原因論、症状論及び治療論 (3) 脳に対する見解等を検討し、最後にこの書物の精神医学史における意義を考えてみたいと思う。

(1) 〃神聖なる病について〃の著者及び著作年代について

この小さな著述の存在は Galenos に知られていたようであるし、ネロ皇帝の時代に Hippocrates の用語の辞典のようなものを書いた Erotianus は、この本を Hippocrates 自身の著書30余点のリストの中にあげている。 また3世紀初頭の Bacchius はこの作品を知っており、彼もこれを Hippocrates の筆になるものと考えていたらしい。

しかし近代の研究者たちは、この書物の著者についても、またこの価値についても評価はまちまちである。Littré はこれを殆んど問題にせず、 Gomperz はこの著者が 〃おどろくべく示唆に富む云いまわし〃 を創造した、とのべ、彼を戦闘的で力強いと評している。Wilamowitz はこれを極めて高く評価し、これは Corpus hippocraticum の中の重要な著書 〃空気、水、場所について〃と同じ著者によって書かれたものであろう、とのべている(5)。

上記の〃空気、水、場所について〃という、かなり長い著書は、殆ど例外なしに大部分の研究者が Hippocrates 自身の記したものと考えているものである。地理的、社会的環境が人間の心身に如何なる影響があるかを経験的に述べたものとして有名であるが、この著書と〃神聖なる病について〃とが無関係ではありえないことはたしかに思える。と云うのは W. H. S. Jones も指摘しているように、この二つの書きものには、てんかんに対する殆ど同じような見かたや表現をしている箇所がいくつも見つかるし、また双方に同じ言葉がよく出てくることもたしかである。例えば ἐκκρίνειν, ἀποκρίνειν, κοιλίαι 等である。ただし、相違点も目立たぬわけではない。ことに〃神聖なる病について〃においてはかなりソフィステースたちの好んで用いた修辞学的技巧がみとめられるが、〃空気、水、場所について〃にはそれらが全然見あたらず、文体に品位があり、全体としてもっとひかえ目で文章の目がつんでいる、といえる。

従って、もし Wilamowitz の云うように、この二つの書きものが、同じ著者によると考えるならば、〃神聖なる病について〃は、とかくてらいの多い若い時代にかかれたもので、〃空気、水…〃のほうは、もっと円熟し、枯れた時代の産物であると考えてみてもよいかも知れない。Jones は面白い想像をしている。彼によれば、〃神聖なる病について〃の著者はもう一つの作品の著者の弟子であって、先生から題を出されて書かされたのがこの小論文ではないかという。

何れにしても、この二つの著作の年代には大差はなさそうである。双方とも否定語として μὴ の代りに οὐ を用いていることからして、それは紀元前3世紀より後ではありえないと考えられ、おそらく Socrates と同時代の人ではないかという想像が成り立つ。また第4章に記されている神々の名前から察して、ギリシアのイオニア地方に住んでいた人が書いたのではないかと考えられている。

(2) 〃神聖なる病について〃における精神病に関する記述

一般にこの著述で扱われている精神障害はてんかんであると考えられているが、現代精神医学から見て果してどうであろうか。それをみるために、まず原典そのものから、原因論、症候論、治療論をのべた箇所をぬき出して、そのまま次に訳出し、列挙して見ることとする。Text は W.H.S. Jones が写本 θ とMとを校合してこしらえたもの(5)によった。括孤内のローマ数字は原典の章を示す。

A. 原 因 論

（I）〃神聖な〃病とよばれているものについては次の通りである。私の考えでは、この病気は他の疾患よりも神聖であるとか、尊いとかいうことは少しもなく、自然的な原因を持つものであると思われる。而して人々がこの病気を神聖な起源を持つものと考えたのは、彼らの無経験のため、またこの病気が極めて特異な性質のものであることへの驚きのためであろうと思われる。しかし人々は、この病気の原因がわからないために、これを神聖なものと信じつづけておきながら、これを治療するためには〃きよめ〃や呪文をとなえることなど、安易な方法をとる。そのことによって実は、この病気の神聖なることに対する反証を立てているのである。もしふしぎなものであるという点だけで（ある病気が）神聖な病であると考えられるべきならば、神聖な病というべきものは、一つだけでなく、沢山あることになるであろう。なぜなら、ほかの病気も同様にふしぎなものであり、驚くべきものであることは、私がこれから示す通りである。しかもこれらを誰一人神聖とは考えないのである。たとえば、毎日熱、三日熱及び四日熱（註。マラリアのことであろう）などは、神聖にして、神によって起るという点において、この病気よりなんら劣るところはないように私には思えるのだが、だれもそれをふしぎとは思わない。更にまた、ある人は、何の明白な理由もなく狂気となり、精神錯乱となって、多くの時ならぬ行動を起すのを見る。多くの人々は睡眠中にうめき、叫び、また他の者はちっ息しそうになり、他の者はとびあがって

戸外に突進し、覚醒するまで錯乱しているが、一旦覚醒すると、あおざめて衰弱してはいても、以前と同じように健全に理性的になる。しかも、このような事が一回だけでなく度々起るのである。このほかにも多くの例があげられるし、その各々について多くのことを云いうるであろう。

（V）しかし私の考えでは、この病は他のものよりも神聖であるという事は全然ない。それは他の病と同じ性質を持ち、個々の病を起こすのと同じ原因を持つ。それはまた、長い経過の作用によって、用いられる療法よりも強力になってしまわない限り、他の病と同様に治療しうるものなのである。その起源は、他の病と同様に、遺伝に存する。というのは、もし粘液質の親が粘液質の子を持ち、胆汁質の親が胆汁質の子を持ち、消耗質の親が消耗質の子を持つとすれば、両親の何れかがこの病気にかかっている場合に、子供たちのうちの何人かが、この病にかかることを防ぐものは何もない。なぜなら種は身体のあらゆる部分から来るものであり、健康な種は健康な部分から、病める種は病める部分からくるのである。またこの病が他の病より少しも神聖ではない、というもう一つの大きな証拠は、これが生来粘液質な者に起り、胆汁質の者は襲わないというところにある。もしこの病が他の病よりも神聖であるならば、胆汁質粘液質の区別なく、すべての者に一様に起る筈である。

（VI）さてこの病の原因は、 他の最も重篤な病の場合と同様に、 脳にある。……

（VIII）この病は粘液質の者を襲うが、胆汁質の者は襲わない。これは胎児がまだ子宮の中に在るときから始まる。というのは、他の部分と同様に、脳もまた出生前から浄められ、内部の（不潔な）ものが排泄されるのである。この浄化作用において、もしその作用が適度に行なわれ、必要以上にも以下にも液体が流れ出ないならば、その子供はまったく健全な頭を持つことになる。ところが脳全体からあまりに多くの液体が流れ出て、そこに大なる融解がおこると、その子供は成長するに及んで、騒音にみちた病める頭を持つようになり、太陽にも寒冷にも耐えられぬようになるであろう。……もしこの浄化作用が行なわれず、脳の中に凝結が起るならば、子供は粘液質になるこ

と必定である。しかし幼年時代に頭部や耳や皮膚に吹出物ができたり、唾液や粘液がたくさんあれば、成長するにつれてこういう子供たちは極めて健康になる。というのは胎内で浄化されるべきであった粘液が、このようにして排泄されるからである。このように浄化された者は、一般に、この病に襲われることはない。これに反して、きれいで吹出物も出さぬ子供たち、また粘液も唾液も排泄せぬ子供たちは、もし胎内で浄化作用が行なわれなかったならば、この病に襲われるおそれがある。

（Ⅸ）この（頭からの）流下物が心臓の方へ通路を見いだすと、心悸亢進と呼吸困難がおこる。またその流下物が腸の方へ行くと下痢がおこる。……

（Ⅹ）もしこの粘液が以上の様な通路を阻まれ、私が上にのべた静脈の中に流れおちると、患者は何も云えなくなり、ちっ息し、口から泡が流れ出し、歯をくいしばり、両手をふりしぼる。両眼は旋回し、何もわからなくなり、場合によっては大便が排泄される。これらの症状の各々が、どのようにして起るのかを私はこれから説明しよう。患者が声もなくなるのは、粘液が突如として静脈の中に流れ込み、空気を遮断する時である。すなわち空気は脳の中にも空静脈の中にも体腔の中にもはいらなくなり、呼吸をとめてしまうのである。なぜなら人が口と鼻から呼吸をするとき、空気はまず脳へ行き、それからその大部分は腹部へ行く。しかしそのあるものは肺と静脈へ行くのである。……肺と静脈へ行く空気は体腔と脳にはいるときに用いられ、知能の働きと四肢の運動をおこす。従って粘液のために静脈が空気から遮断されるときには、患者は口もきけなくなり、正気ではなくなるのである。血液が停止し、平生のように行きわたらなくなると、両手は麻痺し、よじれるのである。小静脈が空気から遮断され博動するとき、眼球は旋回する。……患者が足で蹴るのは粘液のために四肢の中に空気がとじこめられ、外へ出ることができない時である。粘液は血液の中を上下に烈しく移動し、痙攣と苦痛をひきおこす。そこから足で蹴ることがおこるのである。……もしこの（粘液の）流れが大量で粘稠ならば直ちに死に至る。……しかしもしその量が少なければ …… やがて静脈の中に分散して大量の温い血液と混ざってしまう。

このようにしてそれが克服されれば、静脈には空気がはいり、知能の働きが戻るのである。

(XVI) このような理由から、患者は風の向きの変化によってこの病気に襲われるものと私は主張する。即ち発作は南風の時に最も多く、次に北風、次に他の風の時に起る。……というのは、南風は必然的に脳を湿めらせ、静脈を拡張するし、また北風は脳の最も健全な部分を圧縮し、最も病める部分、また最も湿めった部分を分離して外へ洗い出してしまう。そのためにこれらの風の向きの変化によって流出物が生じるのである。……

B. 症 状 論

上の原因に関する記述の中にすでに大発作、もうろう状態、精神運動発作等の症状がいくつも見うけられたが、次にその他の箇所で、症状の述べられているところを列挙してみよう。

まず興味あるのは、著者がこの病の Aura (前兆) をはっきりと観察しているところで、いわゆるヒステリー性の発作とは明らかに区別できるものを彼が見てとっていたというべきであろう。次がその箇所である。

(XV) この病気に慣れている人々は発作が間近くなると予感を持ち、他の人々の許から逃げ去る。もし自分の家が近ければ家へ帰り、もし近くなければ最も人のいないところへ、つまり自分が倒れるところを見る人が一ばん少ないところへと逃げて行き、すぐさま頭をかくす。それは自分の病に対する恥ずかしさのためであって、多くの人々の云うように、神への恐れからではない。幼い子供たちは初めのうちは所かまわず倒れる。なぜならば彼らはこの病をよく知らないからである。しかし度々発作を経験してからは、予感のするときは母親たちか、または彼らのよく知っている人々のもとへと逃げて行く。それはこの病気に対する恐れと畏怖からである。なぜなら彼らはまだ恥ずかしがることを知らないからである。

以上のほか第四章に多くの症状がのべられている。この章では、著者はこの病を神々の故にして患者を欺く〃現代の魔法使い〃〃にせ医者〃たちに対して烈しい攻撃のことばを浴びせかけているが、その際、ことこまかに、彼らがどういう症状をどういう神に帰しているかということを、例をあげて説明して

いるので、期せずして我々に多くの症状を記載してくれた事になった。次にその主な部分を訳出してみよう。

(IV) …… もし患者が山羊の真似をし、吠え、または右側に痙攣を起すならば、彼らは神々の母のせいであるという。もし患者が鋭く高い呼び声をあげるならば、彼らは彼が馬に似ていると云い、ポセイドーン（註。海、地震、馬などの神）がその原因であるという。またこの病気の烈しさのために、屢々おこるように、いくらかの大便を洩らすならば、女神エノディア（註。女神ヘカテーと同じ。道路の守護神であると同時に魔法使いや魔女の守護神であるとも考えられていた）というあだ名がつけられる。もし患者が口に泡を吹き、足で蹴るならば、アレースの神（註。戦いの神、又〃好戦的狂気〃の神）が原因であるという。またもし夜中に恐怖や恐愕、譫妄がおこり、患者がベッドからとび出したり戸外に突進したりすると、女神ヘカテー（前註参照）が攻撃しているのだとか、英雄たちが進撃して来たのだと彼らは云うのである。……

C. 治 療 論

治療論としては大して見るべきものもない。それはとりもなおさず、臨床において精神障害に対して、ほとんど無力であったことを示すのであろう。しかし治療の原則というようなものは、最後の章にのべられているので、それを次に訳しておく。

(XXI) 神聖と云われているこの病は他の病気と同じ原因から起る。即ち肉体に出入するものから、寒さ、太陽、また風の変化や動揺からも来る。これらのものが神聖なのである。故にこの病気を特別なものとして、他の病よりも神聖なものと考える必要はない。これらはみな神聖なのであり、またみな人間的なのである。各々がそれに特有な性質と力とを持っているのである。どれ一つとして絶望的なものはなく、治療不能のものはない。大部分の病は、それを起した原因と同じものによって治るのである。ある病には食物が、他の病には他のものが必要なのである。……摂生法によって人間の中に湿、乾、熱、寒の諸状態を起す方法を知っている者は、浄めや魔法を使わなくとも……この病をもまた治しうるのである。

(3) 脳に対する見解

この著述には〃神聖なる病〃そのものを扱う以外に、脳に関する極めて進んだ一般的見解が述べられているのが注目をひく。以下がその主な箇所である。

(XVII) 我々の快楽、よろこび、笑い、冗談も、また悩み、苦しみ、悲歎や涙もみな脳以外のどこからも生じない、という事を人々は知る必要がある。脳によって我々は考えたり、見たり、聞いたりし、醜と美を、悪と善を、快と不快をみわけ、ある場合には習慣によって判断し、他の場合には効用によって知覚する。同じことが我々を狂気または譫妄状態に陥れ、我々に恐れと戦慄を抱かせ、夜となく昼となく睡気や不都合な過失や対象のない不安や放心状態、習慣に反する行動等を起す。これらの悩みはみな脳が健全でない時に現れる。即ち脳が健康でなく、異常に熱いときか、湿めったとき、乾燥したとき、または何にせよ、それが慣れていない不自然な状態になったときに生じる。狂気はその湿気からくる。脳が異常に湿めってくると、それは必然的に動く。それが動くときには視覚も聴覚も静止しておらず、我々はあるものを、または他のものを見たり聞いたりするのである。而して舌というものは常に我が見たり聞いたりするものに従って語るものである。これに反し、脳が静止している限り、人は知性を有するのである。

(XIX) このようなわけで、脳は人体の最も力強い器官であると私は主張する。なぜならば、それが健全である時には、それは空気によって生じる諸現象を我々に解釈してくれる器官であるからである。というのは、これに知能を与えるのは空気だからである。眼も耳も舌も手も足も脳の認識に従って行動する。実際に身体全部が空気に関係する度合に応じて知能に関与するのである。意識にとって脳は使者なのである。……

(XX) 従って私は脳は意識の解釈器官であると主張する。横隔膜（註。原語 φρένες は知恵を与えるという意味の動詞 φρενόω から来ており、この器官が知性の座と考えられていたことを示す。）の名は単に偶然と習慣から来たもので、現実と自然によるものでない。そして私は横隔膜が思考や知性

に対して如何なる力を持っているか知らない。……或人々は心臓こそ我々がものを考える器官であると云い、この器官は苦痛や不安を感じるという。しかしそうではない。それは横隔膜の場合と同じように、ただ病気をおこすだけである。……どちらの器官も知脳に関係なく、これらすべて私の述べたことの原因は脳なのである。従ってこれは空気からくる情報を知覚する最初の身体器官であるから、もし季節のために空気中に何か烈しい変化がおこるならば、脳もまたそれまでとは異ったものになる。従ってこれを襲う病気は最も急性で、最も重く、最も致命的であり、経験を欠く者にとっては最も判断の困難なものであると私は主張するのである。

考　　察

以上〃神聖なる病について〃から抜萃したものをここでまとめて考察してみたい。

原因論としては、いくつかの原因乃至誘因が折衷的にあげられている。まずV章で遺伝ということが根本的原因としてとりあげられているが、この遺伝は先天的な体質——それも体液学的にみた体質及び脳の状態を生み出すものとして考えられている。之は云うまでもなく Hippocrates の有名な四基本体液の説に基くものであろう。この説によれば、人間の体には四種の体液が適当に配合されて適当な機能を営んでいる。すなわち血液は温と湿の性質、黄胆汁は湿と乾、黒胆汁は冷と乾、粘液（脳内で形成される）は冷と湿の性質を持つ。これら四体液の割合は個人によって異るが、各人の健康はそれぞれに適当な体液の割合があって、その中のどれ一つが多くなっても病気がおこる、という。著者によれば〃神聖なる病〃は先天的に粘液体質の者におこり、脳から過剰な粘液が、突然静脈の中に流れ込むために窒息や痙攣の発作が起るという。

また第XVI章では気象、とくに風向きがこの疾患の成因に関係があると述べているが、これは上記のものとくらべて誘因程度の重みを与えられているようにみえる。もし著者が、〃空気、水、場所について〃を書いたと思われる Hippocrates 自身の直弟子であったとすれば、当然これら環境要因を述べぬ

わけに行かなかったであろう。

さて現代の精神医学からみて、この原因論はもちろん極めてそぼくと云うほかはないが、しかもなおそこに若干の深い洞察をみとめることは困難ではない。第一に遺伝説である(V)。これはなお今日に於ても重要な原因の一つとしてみとめられている。例えば、てんかん双生児の研究では一卵性双生児の場合、諸研究者のあげている一致率は46%～67%で、二卵性双生児ではわずか3%～12%にすぎない(9)。第二には粘液の脳内過剰説である。これは例えばMc Quarrieや宮川などの云うように、水分蓄積が痙攣を誘発しやすい、という観察と実験に基く説の先駆とも考えられる。Corpus hippocraticmの中にはてんかんに対して脱水療法をすすめているものがあるが、これは最近の発作治療剤 Diamoxの作用機序として説明されている脱水作用、利尿作用などと原理的には一致する(10)。また粘液質の者にのみてんかんが起るという説は、現代の精神医学徒に Kretschmer の〃体格と気質〃における Viskosität (11) や Minkowski 夫人の glischroïdie の概念(12)を思わせずにはおかない。しかし〃神聖なる病について〃の著者もしくはその他の Hippocrates 学派の人々が性格との関連にまで思いを至していたかはもちろん不明である。

症候論としては、前兆(XV)、大発作(IV、X)もうろう状態(IV)などについて細かい記述があり、強直性痙攣に係う意識喪失、歯をくいしばること、口に泡が吹き出ること、大便の失禁、四肢の間代性痙攣、もうろう状態における行動とそのあとにくる覚醒など、正確な観察に驚かされる。これらを見れば、〃神聖なる病〃とはやはり epilepsy(てんかん)のことであろうと思うほかないが、しかし、もちろん、この著述に記載されている症状がすべて真性てんかんであるとは考えられない。〃右側の痙攣〃(IV)はいわゆる Jacksonian epilepsy であろうし、また熱病その他の身体病に伴う症候性てんかんもあろう。ことに第XI章で小児の痙攣を扱っている中には単なる“infantile spasm”や〃熱性けいれん〃やいわゆる“breath-holding spell”(13)などもはいっているであろう。また第XII章の老人の痙攣の中には卒中発作などがふくまれているであろうことは、痙攣発作直後の即死や麻痺をのべて

いるのを見れば、明らかである。また Abse の云うように (14)、おそらくヒステリー性発作も多くの場合、当時の医師にはてんかん性痙攣発作と鑑別ができなかったにちがいない。

治療論についてはほとんど何も述べられていないと云ってよい。しかし自然的原因説にもとづいて合理的な治療可能論を唱えているところは当時としては異例のことであったろう。てんかんの根治法は現代においてもまだ発見されていないが、少くとも対症療法的薬物の研究は目ざましい発展をとげつつある。このような治療への努力は、この書物に示されている様な治療可能論、楽観論に常に支えられて来なければありえなかったろうと思われる。

本書にあらわれている脳に対する見解は、意識の座を横隔膜や心臓にあるものと考えていたそれまでのみかたに対する画期的な改革と進歩であり、現代の大脳研究への先駆的洞察と云わねばならない。同時代の哲人 Socrates にしてなお多分に神がかった精神観を有していた事を考えれば、この合理性は一層際立ってみえる。おそらくこの見解があまりに先駆的進歩的であったが故に、この考えは必ずしも後世にうけ入れられず、18世紀に至るまで、さまざまの誤まった考えに曇らされて来たが、近代に至って脳研究が飛躍的におし進められるようになって、この遠いギリシア時代の医学者の慧眼はみごとに裏づけられたと云える。而してこのような学問の動向を推進する一つの支えとして、この著書に示された洞察が常に重要な役割を果して来たことは2000年の精神医学の歴史を通して、たとえ断続的にせよ、たしかめられるのである。

Corpus hippocraticum には、ほかにも精神障害についてのべたものがある。たとえば〃疫病について〃には分娩後精神病、恐怖症などの描写があり、また結核、マラリア等における譫妄、赤痢に伴う記憶障害、重症出血による急性錯乱などの記載がある。また 〃箴言〃 には精神病の分類がのべられており てんかん、マニー（異常昂奮状態）、メランコリー（異常抑うつ状態）、パラノイア（今日の精神荒廃？）、ヒステリー（女性のみの病気で、子宮が体の中で動きまわるために起ると考えられていた）などが挙げられている。これらの名称は、その定義こそ多かれ少なかれ変更されはしたが、現代精神医学にもな

おそのまま用いられている。しかし、これらの記載はすべて断片的であり、精神疾患のみを集中的にとりあげて述べた著述は〃神聖なる病について〃のみであると云える。しかもこの著述の第XVI章から第XX章に至る論旨にみられるように、筆者は精神機能の中枢器官としての脳の位置をしっかりと把握しており、その上に立って〃神聖なる病〃を脳における過剰な粘液によるものとし、またもし脳に胆汁が過剰になれば異常昂奮状態（マニー？）が生ずると云っている（XVIII）。このような体液学的思考は、現代の精神医学においても自律神経・体液学的関連として再びとりあげられており、やはり一つの偉大な先駆的洞察と云わねばならない。

結局この書物も、Taylor の云うように(15)、ギリシア精神の一般的な傾向のあらわれとして、人間の精神を愚かな不安や不当な心労から解放しようとしたものであろう。〃物事をその正当な場所へおくこと——人間的なものと神的なものと、自然的なものと超自然的なものとを……。もしかすれば超人間的なものも神的なものも、人間的物質的なものを単に裏がえしたものにすぎないかも知れなかった——丁度同じ程度に宇宙秩序の一部分であり、法則性に従うものであるかも知れなかった〃。このような思想的傾向が〃神聖なる病について〃なる小論文の backbone であり、これが精神医学の長い歴史を通じて、暗闇の中に点滅する灯のように、さまざまの時代や場所において真理と人間愛の使徒たちを励まして来たものと思われる。ことに精神病者を魔女扱いして迫害した中世の暗黒時代に対して〃第一次精神医学革命〃をなしとげた Cornelius Agrippa (1486～1535) や Johann Weyer (1515～1588) のような人びとにおいてそれはとくに明らかである(1)。

〃エジプト、メソポタミアのような優れた古代文化諸国は、疾病の自然的説明と超自然的説明との間を動揺したのであったが、ギリシア人は徹底的に自然的説明を行なった。従って彼らが学問的医学と精神医学との創始者となるのである〃と E. H Ackerknecht は云っているが(16)、精神医学に関してこの事が云えるのは、主として Corpus hippocraticum 中のこの〃神聖なる病について〃なる論文によることは、以上のことから明らかであろう。

引　用　文　献

1. Zilboorg, G.: A History of Medical Psychology, Norton, New York, 1941; 神谷美恵子訳：医学的心理学史，みすず書房，1958.
2. Sticker, G.: Die Volkskrankheiten erstes und drittes Buch, In Sudhoff, K. (Ed.): Klassiker der Medizin, Bd. 28, Leipzig, 1923.
3. Fuchs, R.: Geschichte der Heilkunde bei den Griechen. In Neuburger, M. und Pagel, J. (Eds.): Handbuch der Geschichte der Medizin, Bd. I, Jena, 1902.
4. Beck, T.: Hippokrates Erkenntnisse, Jena, 1907.
5. Jones, W.H.S. (Ed.): Hippocrates, 4 vols., The Loeb Classical Library, W. Heinemann, London; Haravard Univ. Press, Cambridge, Mass., 1957-1959.
6. Meillet, A.: Aperçu d'une histoire de la langue grecque, 4e éd., Hachette, Paris, 1935.
7. 小川政修：西洋医学史，第2版．日新書院，1944.
8. Roback, A. A.: History of Psychology and Psychiatry, Philosophical Library, New York, 1961.
9. 笠松章編：臨床精神医学，中外医学社，1959.
10. 田椽修治他：てんかん—治療と予後—，精神医学，**3**：89, 1961.
11. Kretschmer, E.: Körperbau und Charakter, 20 Aufl., 1950.
相場均訳：体格と性格，文光堂，1960.
12. Porot, A.: Glischroïdie, in Porot, A.: Manuel Alphabétique de Psychiatrie, Presses Universitatires de France, Paris, 1952.
13. 和田豊治：てんかん—臨床と脳疲—，精神医学，**2**：779, 1960.
14. Abse, D.W.: Hysteria,. In Arieti, S. (Ed.): American Handbook of Psychiatry, Basic Books, 1959.
15. Taylor, H. O.: Greek Biology and Medicine, Marshall Jones, Boston, 1922.
16. Ackernecht, E.H.: Kurze Geschichte der Psychiatrie, F. Enke Verlag, Stuttgart, 1956; 石川清，宇野正人訳：ヨーロッパ臨床精神医学史，医学書院，1962.

Miyeko Kamiya

"On the Sacred Disease" as Viewed from the Standpoint of the History of Psychiatry

Résumé

Excerpts are translated from the original Greek text of the little book entitled "On the Sacred Disease" attributed to Hippocrates as one of the writings belonging to the so-called Corpus hippocraticum.

After a brief comment on the authorship and the date of writing, the excerpts are classified into those dealing with aetiology, symptomatology, therapy and general views on the function of the brain. Those views are then considered in the light of the modern knowledge on epilepsy and other psychiatric disorders and their meaning is discussed from the point of view of the history of psychiatry.